

我々の歴史的任務とは何か

新生入歓迎実行委員長 中嶋 悅勝

1970年、この政治的・社会的激動の70年に入学した全ての新入生の諸君に、現在日本の社会的動向の本質とⅡ部の特殊性を踏えた明大の情況を話すながら、新入生諸君そして我々1人1人が担うべき歴史的任務の本質と、また今後の方向性を提起して、歓迎連帯の挨拶としたいと思います。

まず、第1に諸君を、ロックアウト体制と呼ばれるこの異状事態の中に迎えたことは、明年6月から「大学治安法」翻訖を主要なスローガンとして闘いぬかれた「全学バリケードストライキ抗争」の1つ成果であることを訴えたいと思います。明大闘争は学生大会等によって大衆的確証と、明治大学全学共闘会議の名の下に広範な学友を結集して開始された。そしてそれが68年-69年東大・日大闘争の切り口たるその質を受けついだ結果としてあったこと、つまり駆逐インサーン制、使途不明金問題等の各大学の改良要求として発展しながらも、バリケード闘争の今までにない長期化、全共闘運動による發展によって、「帝大解体二重権力構造」のスローガンに表わされるように、現在の教育機関体制や、駆逐秩序解体という、大學の根柢問題で進み、又次1月決戦に示されたごとく権力と真向から対決し、自身の権力までを問題とする闘いにまで到っていること。69年全共闘運動の全面開花と全国大学闘争の大爆発という情況の中で、大学治安法が導入としてはっきりと帝大闘争としてあったこと。現在の大学、とりわけ明治大学における「学生の自治」なる甘い言葉を賜物を告発し、当局、教授会による「以前」でしかないことが明らかにされるや、闘う学友を攻撃する策動しかなかった反人民性の本質が露呈されたこと。そして全国の大学と堅く連帯し、その闘う学年の結集体、全国全共闘連合の先頭で闘った。明大全共闘。その強固な隊列は、70年安保、沖縄闘争を明確に捉えきり、帝国主義的神羅返交渉たる1月佐藤訪米を阻止すべくあった10月-11月の闘いを勝利的に勝ちとっていた。だからこそ、国家権力、学校当局一体となった御座に置かれて、國家権力による安保非常体制に呼ばれる彈圧体制や、他力学校当局のロックアウト体制による革命派学生の追い出し、大学改革委員会答申また進級、卒業を倒とした学生の分断、正常化策動を強権的に行なわなければならなかつた。

ロックアウト体制下での明大は決して異状なのではな

く、戦後大学教育の本質を示すものであり、学校当局がその切っ札を使わざるをえなかつたことをみても、その対立点を明確に闇にとてきただけの一つの成果と言えるだろう。現在の学内に反動化された辻の状態を、我明大共闘の学友が闘いを更に発展させる中で突きし、ロックアウトを続けることを、もはや許さないだろうことを宣言したい。また新入生諸君との現実を認識し、自分自身でつかみとり主体的に行動されんことを呼びかけたいと思います。

そして第二として、我々自身が明大闘争の過程で獲得した「明大解体の論理」について述べたいと思います。それは現在の体制に生きる学生存在とは何であるのかという間へかけから始められたのである。資本主義社会体制に於ける形成が「榨取するものの冷酷さに対して、榨取されるものの徳頃さが、有識に対して無知が対応させられねばならない」とより我々にとって、学び教育とは、その当時の支配の必要によって打ちだされることなのです。個人の生活が決して社会、国家から切り離されて、独立したものではないように、大学、学問もまた社会、国家から切り離してはならない。そもそも大学の存在自体は資本主義社会の要求であり、その社会開拓を維持する為のものであるのです。授業を受ける、その言葉を示すように、大学における学問は愛好的であり、制約である。その多くは教室が一方的な教員の話を聞き、ノートしているにすぎない。学ぶという抽象的な権利も実は授業を受けた権利であり、そのこそは労働者の働く権利が取扱われる権利であるように教育される権利でしかない。ブルジョワ社会はその分業形態の特質から第1に高等教育、第2に専門教育による職能を要求し、それらの教育は全体としては階級教育が主軸を形成している。ブルジョア社会はそれを駆逐して階級運営のためと同時に階級下層階級のために大学を頂点とする教育体制を必要としている。本人の意思にかわらず、大学卒というレーベルが後の物質的精神の生活を規定してくれる。それも更に、東大をトップとして、一流校、二流校といったように別が社会的になされている。そしてこうした分業的教育構造が資本主義社会を、その階級秩序を支えているのであるわけです。学生は将来、労働者として被押収が約束されていると同時に高級中級管理層の一員として他の労働者の抑止にも手を貸してゆく。それは資本が大学を要求する以上、学生が

世界を我らに

<自治会パンフレット>

目 次

1. 歓迎実行委員長 中嶋 悅勝
2. 学苑会委員長 炭谷 久雄
3. 各学部より 各学部自治会
4. 研究部連合会 加藤勲
5. 寮自治会
6. 特別アピール 全学共斗会議



新人生歓迎実行委員会

学苑会を世界史の動輪とせしめよ

学苑会委員長 炭谷 久雄

最近、親しい友人と面会した時、頭に思っていることすべてが言葉として表現出来ない自分がつきました。1種の言葉障害というべきものか。長い間中生活、取り分け勉強生活を送って精神的機械の喪失でもたらすようである。今日の激烈な階級闘争は権力をして最も多くの月以上の長期拘束を強い。僕もすでに6ヶ月近く拘束を強いてられている。会話を面会以外全くない日々を過す故に頭の精神構造が少しつぶれ化するであろう。人間の肉體も頭も使わなければ退化するのは当然前例であるが、権力の不当長期拘束は、この権力をもてて行なわれているのと思うと怒り身体が熱くなる。

新しい明大的学友諸君！そして闘う仲間達！マルクスは「共産党宣言」で書いている「これまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である。自由と奴隸、貴族と平民、領主と農民、ギルドの親友と職人、つまり抑止するものと抑止されるものとに、つねに対立し、ときには戦闘と、ときには公敵と終焉なくたかんできた。そしてこの闘争はそつど全社会の革命的改造であるが、さもなければ、あいたから階級の公敵に陥った。……封建社会の落第から生まれきた近代のブルジョアジー社会は階級対立を庶民化しなかった。それはまだ新しい階級、新しい正規条件、新しい闘争形態を吉にもおきかえたにすぎない。けれど現代のなまむけブルジョアジー時代は階級対立を単純にしたこもと特徴とする。社会全體が敵対する二大陣営へ直接、あい対立する二大階級へ、ますます分裂しつづける。すなはちブルジョアジーとプロレタリアトへのこれは明治社会の分析から提起している問題であり、現代社会においても、普遍である。ただ社会機構の複雑化により巧妙な抑止形態へと変化しているにすぎない。社会を始めとする革新の力と称する人々は、この科学的、マルクス、レーニン主義を否定し、労使協調等々の言葉とともに人民の利益に敵対している。だからこそ、目に見える如く激しく階級闘争は、マルクス、レーニン主義の暴力的革命運動を復活させ、ますますその正しさを公敵と公衆的と確認しつづかる。肥大化した日本帝国主義は、高揚する階級闘争を儲けた暴力的刑罰で強化している。万国博、GND世界第2を含む言葉に資本主義の永遠な発展があるのによく想をふりまさ、一方において忍びる社会不安を強権的に警察力を行使して乗りろうとしている。しかし社会矛盾は拡大こそ

すれ、そして権力の弹性は1時的に人民の運動を押えたとしても、人民の革命的意志は増えさせ、そのエネルギーは必ずしも浮在を粉碎し勝利的前進を獲も取るであろう。

この間の大学闘争は明確に今日の社会百舌を感に反映しており、この情勢は1時に弱まらずとも、増え廣範な人民階級に浸透し、その主力は学生運動から労働運動に移つた。日本学生運動は概して明大一貫して革命派の指導の基に階級闘争の先鋒隊としての任務を果し、67年、10月8日田調爭以前の激動2時間に切り開かれた階級闘争の地平は、反帝国主義と暴力的闘争の正しさを証明したものである。東大、東大闘争を始めとした全共闘運動は革命的学生を発展させ、反対委員会を中心とした労働運動においては「労働者全共闘運動」のスローガンのもと全共闘運動の今日的旨性を擡ぎ取っている。4.28沖縄闘争、6月安保決戦を目前にひかけたこの革命的全共闘運動ははるかに飛躍的質的發展をもつて、広はん人民、学生、労働者を結集し階級闘争の勝利を保証するであろう。階級闘争の深化必然的に権力の弾在ニスカレートとなつて表われている。現在、東大闘争を始めとして昨年4.28沖縄闘争、10.21国際反戦闘争、11.17佐藤訪米阻止闘争等を含めて、約1000名の同志が最高1年間で最も底辺半端年である不當長期拘束を強いられています。これらの不當な長期拘束は闘う同志諸君を完全に実戦活動から離し肉体的、精神的殺戮を意図しているものであり、ブルジョア裁判官は常日ごろ言う法律威厳を、自ら破壊しない行為にはからならない。

ちなみに、この間の階級闘争によって、三権分立を前提とする司法の行政と一体化した彈圧体制は三権分立を犯す犯法行政の前段を示しているものにはからならない。社会を始めとする革新の力と称する人々は、この科学的、マルクス、レーニン主義を否定し、労使協調等々の言葉とともに人民の利益に敵対している。だからこそ、目に見える如く激しく階級闘争は、マルクス、レーニン主義の暴力的革命運動を復活させ、ますますその正しさを公敵と公衆的と確認しつづかる。肥大化した日本帝国主義は、高揚する階級闘争を儲けた暴力的刑罰で強化している。万国博、GND世界第2を含む言葉に資本主義の永遠な発展があるのによく想をふりまさ、一方において忍びる社会不安を強権的に警察力を行使して乗りろうとしている。しかし社会矛盾は拡大こそ

学生である限り、大学が存在する限り、学生はこうした二重構造をもって資本制社会に体制内的に存在せざるをえないのです。体制内存在としての学生への根深の間違いかげ、自己告発によって第一歩を踏み出した証です。又他方、日本が5年目韓独条約をマルクマールとして再度の東南アジアに向けての経済侵略を開始しており、国内の政治、経済、教育の帝國主義的反動が進行しつつある。その中で教育の再編に対する闘いとして「学問の自由、大学の自治」の名で陰蔽された戦後大学教育における研究、教育、学問の階級性、支配秩序を実戦的に暴き出した。「平和と民主主義」を標榜とした学生の要求闘争、経済闘争への主張を打ち表し、大衆運動の展開のうちに教室、事務室、研究室に対する封じ闘争、無期限ストライキ闘争は、革命派を全共闘へと結びさせていた。個別学問、研究、教育に問われた問題は、大学の社会的存在と帝國主義支配の一環として大学の存在が問われるのであります。帝國主義大学解体二重権力創出の闘いのこの発展段階をよく表し、須崎を革命的ヨーロッパ、路線となり、更に次なる発展を指示し示すものとなっていましたのです。

第3として我々がすむ明治大学の、大学治安法成立後、大学改革委員会答申するものによる教育改編の実化に対して、具体的反対の組織化を訴えたいと思います。我々が準備すべき闘いは、常にそして全て権力、このいやしむべき明大理事会権力であり、そしてその理事会権力さえ動かし、産業、金融資本家共謀であり、その表れとしての国家権力機動隊に対して行なわれるべきであり、これら権力に対して、間断なく、連続的、非妥協的闘いを準備し、打ちねぐことをなす。しかしながら権力に対しては闘わぬことを宣言し、劍を亮り、お話し合いで問題の解決を、まさにズバズバの妥協的解決をしか追求しないものがいる。闘う友に対しては、「トロフィキスト」と呼び革新的な暴力しかるる諸君がいる。多くの人々が闘いに起きた者達に質問を寄せ、自らをも立ち上ろうとするとき、日共へ景の拡大のため、セクタの組織の防衛のため結局のところ権力側の一別動部隊として、闘争破壊を行なうことしかできない民青

諸君がそれである。70年に向かって、又今後も「トロフィキストを全ての学園から追いやだすこと」を唯一の闘争目標としている我がわむべき民青諸君を我々は強く煽動しておかなければならぬだらう。権力に対する闘いはそれによってしか支配権が倒されないと主としただけではなくて、闘いの過程で始めて我々古い価値感をかなぐり捨て、新しい価値感を、新しい体制をもや支配や抑止のない社会まで作りだせるからこそ必要なのです。

年をむかえ、国内外をめぐる政治的情況は急速に反動化している。日韓条約によって海外侵略の第一歩を踏みだした支配者は、佐藤赳氏一同日本共同声明によって、アシアソ連へと日米軍事同盟を強化し、72年沖縄反対運動をはかり、又三里塚の成田空港の強制土地測量の実施等々を進めていている。しかしそれは新たな矛盾を生みださざるをえない。1月沖縄全労第1回、第2波の解雇粉砕、基地撤去のストライキ闘争がそうである。三里塚の問題の闘いがそのままである。すると被抑止者の闘いは激化し、急速な革命的構築を生みだしている。我々はこのような状況をしっかり把握しなければならない。しかしながらそれは一方に沖縄があり、他方に明治のヨーロッパ、2部改編があるといふような一般公認ではなく、今日の分せられた階級社会においてすべての政策の決定が、複数の階級の闘いによって規定されること、そのための全状況が個別日本の状況においてどのように表われているのか、その分析が行なわれなければならないのです。事物を總体として、個別を全体まで引きあげてみると観點を養なってほしいと思います。我々の闘いは、明治ロックアウト翁翁から、4.28沖縄解放闘争、4月～6月安保闘争へと向かわねばならない。最後に、新生実行委員会の予定している、オリエンテーション、サークル紹介等の諸行事に積極的に参加し、堅い連帯を勝ちとることを呼びかけて挨拶にかえたいと思います。

新生実行委員会 委員長
商学部 商学科 3年
中嶋 悅勝

隸属を断ち切る

文 学 部

街には商品が溢れ、誰もがく明るい>うら笑いを表しているが、<明るい>といっても、明るい未来が約束されているわけではない。いやむしろ自己の将来はいたる所に散在する悲惨が暗示している。絶望と極限まで進行し、まんえんしているが、商品の潮流の中で幻想をかぎたてられ、ただただそのことの因縁説いている。

しかし、われわれはこの資本制社会の繁栄実感のうちに窮屈と顛倒をみてとり、だがしかし、同時にその真只中に芽生えつつある新たな呼吸は、それをプロレタリアートとしてますます自ら鮮明にしつゝ表現してきていることを知っている。絶望として存在している一切のブルジョア財團の恣意のうちに新たな幻向性を闇うプロレタリアートがほらむぼんとしており、われわれ学生も「学生」という個別の領域から、その普遍的課題へと肉薄すべき血みどろの宿題を、全国教育争のバリケード構築をもって佐藤訪米実行団止弾として貫徹し、今や「学生」という市民社会がわれわれに与えたワクを超える闘をして現実化している。

われわれは新入生諸君に対して1日も早く自らの制約を突破する実験を開始し、共同の行動の中からプロレタリアートの新たな回顧を構築する戦略に加わることを要する。

闘うとは何なのか、制約を突破することは何か。それは単に「敵」を打倒することだけではない。自分が生きているこの市民社会が自分にとっては何かあり、自分がどのような発展を欲求しており、現実の市民社会がその発展にとってどれ程桎梏になっており、しかし現実の自分が何でないということを、他者と自己の関係をとりて把握し変革することであり、現実の矛盾を他者との共同の行動の力で癒し、しょとする運動にほなならない。

そして今や、あれやこれやの現象の裡に、歴史の必然として動いている現実の姿を洞察し、生きたわれわれの人格性=肉体性によって、絶然として存在しているブルジョア諸階級を粉砕し尽す者反乱の時節はやってきたのだ。われわれ自身が既に例をこころうに創り上げていった激闘の波、もともとそれは歴史的必然として存在しているのだが、この歴史の脈動に恐怖いただき、あるいはその本質を理解できず、「激動期だ!」「激動期だ!」とあわてふためく小市民連から証された、「激動期だ!」たらしめるところの世界はいかなる世界なのであろう。

— 5 —

激動期とは一口でいうなら、先進国一後進国を貫き「资本主义」圓をひきこんでの政治=社会秩序の帝国主義的再編とその中のブルジョアジーとプロレタリアートのしぐれを削る階級戦への突入にはかならない。それは「原爆」そう言ひのなら言ひがいい。しかし、そのような諸君は自分の周囲で現実に何が進行しているかを直視したことがあるがゆうから個人と個人の激烈な競争と分断の中へ自分自身をたき込まなければ、そして競争に充ちぬき、他者を支配しない限り自分の生活が満足されず、他者を粉砕し支配することが「正統」として希望されるこの市民社会。そして必ずしも大衆はわずかのどこかをかえする市を表す「貧困者」が歴史されるこの市民社会。この陥落階級の属性により成る市民社会を直視した者がいるだろうか。われわれはより暮らし起する、歴史の必然として動いている現実を直面して消滅しなければならないといつゝいの闇の出発点はここにあるのだ。

「空間・研究の山」「学園の首府」というブルジョア社会秩序の構造を根底からくつがえした教育をめぐる闇の全国的発達は、現行の教育の底を告げることで開始された。資本制社会に於ける教育とは、自由な自己活動の外見の下、学生ひとりよりが良い「商品」として自己を奇麗に専門化することを好みと好まざるにかかわりなく強制される事でしかない。

つまり、学生はブルジョア社会の中で「豊かな生活を得るために自己を高価な労働の商品として売さんため」教育サービスを買いつかず消費するといい学生生活を通して専門性を獲得することを自分自身に譲して行かなければならない存在でしかない。そのことをして資本の下への危険な隠鼠があるのである。国家権力の頂点から教育の帝国主義的再編の貢献と、社会が学生諸個人に強制する専門化型化の方向は「産学協同路線」として進行し、産協路線の貫徹は日本ブルジョアジーの延命を決する重大なカギだとあっても過言ではない。そして資本の攻撃の前に、自己の大学資本としての個別利害を守らんとし、現象的に政府に反発しながらも、自主規制一自主改革路線として油脹しつつある大学当局。この教育に対する実質的批判は同時に市民社会の誤実的批判でなければならぬ。なぜなら、教育はその社会によって制約されているのだから。

では激烈的競争と分断の下、学生を専門ロボットとして型化した強制化計画をとする、教育の帝国主義的再編をおこなわざるを得ないこの社会とは何なのか。

中野野務所にて

おじとどることはできない。

新入生諸君! 現実直下進行する直接の矛盾を解決しようとその対象との格闘の中から、社会的政治的制約を突破する社会政治斗争へと対象領域を拡大することをとうして、われわれこそに闘わんことを熱望する。

全ての闘う学友諸君は第二文学部斗争委員会に結集せよ!

アジア太平洋安保粉譯!

帝国主義ブルジョア政府打倒!

沖縄プロレタリア人解放!

産学協同路線粉譯!

文学部自治会(駿台文学会)

文学部新生歓迎会委員会

再度の全共斗運動の創出を!

商 学 部

1969年學園斗争を主力的に莊設し、今日『正常化』がもたされたならば、われわれは決して屈服することなく再度の戦線を構築であろう。

新入生の皆さん、この明治大学を問わず全国あらゆる大学において、燃え立つた大学斗争は、何故「超らなければならないかなかったのであろうかを今一度、考えてみて下さい。

そして、あなたたの高校に於いて一体何が起り、起つたのかも考えてほしいです。そしてあなた自身がその時、何をしようとしたかをも頗りみてもらいたいのです。

では次に、第二次明大斗争の説明を述べることにしましょう。

東大、日大斗争が、全国各地の大学に於ける、矛盾の露頭と、今までの矛盾の上あぐらをかき、観念的に大学の自然、学問の自由を踏み、自己満足と自己改良に陥っていた大学人の自己批判をもたらし、全ての知識人を学内から一掃する運動から組織の大共斗運動の露出があつたのです。とりわけ、明治大学に於けるキヤウは、一部学生会(星間部)は、六項目要求という形をもって内改要求と、君達を呼んだ教養審議粉譯を主にスト法決議の倒壊的改組の中に於いて確立し、6月20日全面的に明治大学の校舎に、斗うちもの、斗う主体的学問の手によってベリタリアーが構築されたのです。しかしがら我が企二部自治会は、大会でのスト決議をそういう意味では合法性的のストライキ宣言を確立はしなかったけれども、明治大学に内改する諸矛盾は、決して東大、日大のそれとは異って存在しておらず、國家教育体制(帝国主義的教育)の一派であるが故に、われわれ斗争の手によって企二部自治会の成りゆきがかかるといふ、晴朗しい發展過程を歩んだのです。東大斗争を考えてみると、決して東大独創の個別大学斗争としてあつたのではないのです。それは確かに、東大東大における創建の徒弟制の内見を在るにあつて、これに向かって斗争をして受けられてもしましょが、われわれは数多くの矛盾の露見を呼び起し、大学の本質は一体学友諸君に何を強要しようとするのかを露

し、犯罪的性格を一掃する斗争として考へる訳です。東大における医学部斗争は實に長髪斗争的といつあり、医学部内の誠に封建的、前近代的支配關係は、多くの学生の犠牲の上に成立し、ショックでいたではありませんか。この医学部内部の問題が完全的な問題として、普遍化された時、学校当局は暴挙に出たのです。すなはち国家構造の暴力装置襲撃隊の導入であり、機動隊における学校支配がそれであったのです。明治大学も現在的に、多くの校舎が板バキにかこまれ、一切の集会、言論の自由は、当局と神奈警察の密諜な連絡体制をもって庄設されているのです。

既も東大、日大斗争は、全国各地の大学に於ける、矛盾の露頭と、今までの矛盾の上あぐらをかき、観念的に大学の自然、学問の自由を踏み、自己満足と自己改良に陥っていた大学人の自己批判をもたらし、全ての知識人を学内から一掃する運動から組織の大共斗運動の露出があつたのです。とりわけ、明治大学に於けるキヤウは、一部学生会(星間部)は、六項目要求という形をもって内改要求と、君達を呼んだ教養審議粉譯を主にスト法決議の倒壊的改組の中に於いて確立し、6月20日全面的に明治大学の校舎に、斗うちもの、斗う主体的学問の手によってベリタリアーが構築されたのです。しかしがら我が企二部自治会は、大会でのスト決議をそういう意味では合法性的のストライキ宣言を確立はしなかったけれども、明治大学に内改する諸矛盾は、決して東大、日大のそれとは異って存在しておらず、國家教育体制(帝国主義的教育)の一派であるが故に、われわれ斗争の手によって企二部自治会の成りゆきがかかるといふ、晴朗しい發展過程を歩んだのです。このことは、ボクダム自尊社会の限界性を自ら主張して乗り越えることによって可能であり、また、同時に、ボクダム自尊社会といふものが、緊急な事態において適切手段、措置を取ることが最大限に可能ではないといふ戦略的自己矛盾を現わしているのです。それ故に

自民党から共産党までの口をそろえ「暴力反対、秩序を守れ」「平和と民主主義」「中絶返還」をうたい、「国民」という名の帝国の臣民は「平和と繁榮」という幻想のあぶくの中であつぱあぶんでいる。自由世界第二の大団、沖縄復國復帰はブルジョアジーの帝國ナショナルズム教義のお題目となり、國を守る氣概が語られ、終選挙は自民党的圧勝という結果を生み落し、帝國の發展の中に自らの運命をみる市民によるファシズム大衆運動の発芽が公明党一新学園として前進し、70年は万博の年として、資本主義の榮光を誇る年だ。

「だがこれが、茶番劇の下、ブルジョアジーの現実社会におけるドミナントな攻撃は音をなして進行する。ドルボンド危機は、後進国に於ける矛盾の爆發「ベトナム戦争」が先進国の中核部をもぎるが事実に表わしている。世界資本主義は自己の機会を乗り切らんため、全面的な国際市場の再編に取りかかっている。日本共同声明にアジア太平洋圏の「平和と安全」をなす「日米協力による世界の繁栄に貢献する」と決意しているがその内容は、資本が資本でも限りがるがれることのできない構造的停滞を乗り切るために国際分業の再編を通じ、抑揚と抑圧と支配の強化に抗するプロレタリアーの世界的波及に恐怖し、階級支配と防衛し維持せんとする決意表明にはかならない。」こうした「資本」ある任務をなす日本ブルジョアジーは測り知れない労働者階級の抑揚と抑圧の強大さを必要としている。労働者をおもな合理化を通じて収益工場制の確立、学生をもおもそつている近代化(産学協同路線の強化拡大)ブルジョアジーが激動の70年代に打ち勝つための労働者、人民、学生に対する攻撃にはならない。それは労働者の実効行動を破壊し24時間そっくりそのまま収容せんとする恐るべき社會的隕石の隕石として進行している。

こうしてブルジョアジーとプロレタリアートのしぐれを削る根柢の対立は現実社会の最深部において、市民社会を根底から覆すすべく、全民教育斗争、合理化反対斗争、三里塚斗争、合理化反対斗争、佐藤訪米反対斗争等々と眼に見える形で爆発している。そして自称、他称「革新」指導部は、労働者学生が自ら押し込まれている該國からの解説のために闘う、始めているその意味を理解できず、昔習った時代遅れの指導を演じ、その上、たち上った者に対して「暴力分子」「逃亡分子」などと見立ちがいな「声を落す満足」している。資本の鉄道の下をかけ闘ういたる者を「暴力分子」というレッテル貼りですまとする「エヒ革新」だ。だが問題はその指揮が現実の力をもっており、そういう「指導部」にすべてを代行させる事でしか自らを政治的・社会的に表現できない圧倒的多数の「隕石」な群衆としての労働者の海外された現実の姿であり、「指導部」による闘争殲殺が進行しておらず、この二重の制約を突破する方向性を持たぬ限り、いくらブルジョアジーと市民を批判しよう、ファシズム大衆運動の前に沈黙をよぎなくされるであろう。

しかし帝國主義者の「命運」かけての70年安保は、総攻撃の中でブルジョアジーの議会制民主主義のギエールをかきぐりすてての大選前の前で、近代の個人の「反逆」の極限の瞬間を見るなかでそのエネルギーは昇華し、個人々は沈黙を余儀なくされている。だが、いまやそのエネルギーは単に個人の「反逆」を超えて個人的自然の衝動、普遍的欲求として結合し、共同し、ブルジョアジー共同体の懸念な人間と人間の関係にかわり、プロレタリアートの新たな生き方とした共同性をもって、市民秩序の穏健運営としてのプロレタリアート階級としての独自の判断を守り突出したプロレタリアート一線戦を生み出さんとしている。

われわれは教育斗争の敗北の過程で実感としての『プロレタリアートの発見』ということを獲得した。プロレタリアートの根柢の解放なくしては、いわばの矛盾の本質的解決はなく、労学を貰く労働者連帯委員会運動を構築し、政治的社会的制約を突破していく政治斗争として、6月、民族抗戦へ押し上げ、全共闘運動を再編強化しなければならない。

しかしあれわれは新入生諸君にファシズムの闘争殲殺を前にして、闘いへの火薬を悲壮な「決意」をもつてすることを要請するではない。10・11・11月安政決戦の衝突波は、政治的国家の頂点から市民社会の最深部までを貫き切った。だがそれは同時に、闘争主体の運動化を呼び、疎外された現象は、いま二つの極へと収束せんとしている。すなわち一方はテロリズム待望のニヒル感に、他方のそれは秩序への回復と観念的認定としての左翼性の保持の二つ。両極をも掲げ、上と下からのファシズムに根柢的に対決しなければならない。

それは自立した諸個人により、資本社会を自らの発展にとって極端と感する力と激情をもくづいた闘争体制を創造することである。それは資本の鉄道によってはずだに引き裂けてしまっているブルジョア共同性に於ける人間と人間の関係(競争と分断)の間に危機と絶縁を感じとり、にもかかわらずその真只中に普遍的欲求の衝動を生みだしつ。新たな共同の下、闘う団結をきたえあける「明るいさつ」はなかろうか。

プロレタリアートの政治斗争、共同体に手をふれる斗いは、このブルジョア社会における諂ひ争の結果を制限するためのそれをこえて、自らの共同の力=团结で支配せんとする欲求を全面開花するためのそれであり、この一切を奪われている故に、一切の闘争せんとするプロレタリアートの感性的、暴力的活動は、だれもその前進を

る者、教えられる者という言葉で表現され、この関係において学生の間としての創造的な生き方の思考と実践といふ問題は切り離せられない。「大学は学問を通じての真探求の場であり、人間形成の場である」というすぐれたアカデミックな言葉さえも使う余地もない。現実に大学に存在するものは資本を要する産業系偏重として教育される僕達である。資本生産が要請する知的技術を切り落す一個の労働力商品たるべく位置づけられた特徴的傾向偏重者なのである。

僕は将来のより良き生活を保証する為に自己の労働力をより高く売るとする。その為により良い成績を得て自己を一段とされた労働力商品とすることに努力する。だから実際に評価されるのは彼自身の人間性ではなく資本の要請する価値を生みだす労働力である。

大学の矛盾は単に学生の社会化現象、群衆の困難さ、理事事務教授と学生との不信や対立にあるのではない。資本社会の再編構造のメカニズムの中にしっかりとくみ込まれた次期労働力の再編部門としての大学そのものの中にある。それ故大学の矛盾は社会的諸矛盾の集中表現であり、大学闘争の激化に日本資本社会の全体的動的状況の直接的反映なのである。

我が明大においても昨年の6.21バケケードストライキ

突入以来止まっていた資本の動かすベルトコンベヤーも群衆の入学で本格的に動き始めた。

僕達はその新鮮な感覚と銃鉄の頭脳とでもなく大学のものほどの幻想を容易に見抜くことができるだろう。だがそれだけでは何を知らない。変わらなければ幻想は強くなり拡大し、僕達の中心に深く沈没していく。問題はどれだけ僕達がその幻想を叩き壊すことができるかにかかる。それは現代日本の支配階級への反対の闘いの中にこそして自らの内なるブルジョワとの対決から始まる。僕達がそうすればする程少數の支配者はあらゆる手段を使つて社会から僕達を抹殺しようとするだろう。だが僕達は聞かねばならない。人間が人間と生きる為に自由であれ自治であれ人間が人間として存在する為の血みどろの闘いの中から得られてきたものもあるからだ。

いずれにせよ、大学は君達の個体性の確立とそれを通じての世界観、人生觀の形成に必要なものを教えてくれるだろう。

大事な事はただ社会をあれこれと分析したり不平不満を言うだけではなく自らの主体性をもって克服し変革していくことを追求することである。

素晴らしい学生生活があることを!

政経学部 自治会

市民社会の根原的変革を

法 学 部

新生入生諸君へ

紙一束の舞う魔術の上で、そして破壊されたパリカードと闇における無数の「死」が散らばる中、「秩序」の英雄どもは、かれらの支配権をあたふと固めなおそうとしている。自分の醜悪な偏別利害を守らんと、病的なまでに肩をくららせ、いまや大学というロボット製造工場のまわりに、極力の手をかりて闘争狂の鉄鍔の林をめぐらしている。

「学問・研究の自由」を信ずる彼等は秩序派をかきあつめ一喝の訓示をこころみたり、「勇敢な撲滅隊」に対する大学の感謝をのべあわせて、「一部暴力学生を排除し、秩序を保持せよ」と命じている。

あの熱病のような教育をめぐる全国的な闘いの爆発は何であったのか。全て解決されたのか。歴史がわれわれに、「帝国か、コミュニーか」いう形で引きつくる70年代にあって、70年安保=日本共同声明をもって帝国主義の再編を社会全体にわたり貫徹しようとするブルジョアの「

アジーの總攻撃の前に、労働者、学生の過激の怒りの爆發は、10・11日安保決戦の後、上と下からのファシズムの大弾圧の下に消滅してしまったのか。否、断じてそうではない。

ブルジョアと学生の新たな共同の下、市民社会の根柢的変革なしには、個々の子供の本質的解決もあるいはないが故に、個々の子供に直接的に対決しながらその解決能力を実現の中から脚と頭脳としてきたえ上げ、資本主義社会を根底から変革する普遍的回顧を、血みどろの対象との格闘のから一見静かではあるが着實に開始している。

この歴史的決定的瞬間にわれわれにとって何が問題なのか。新生諸君、君たちが受け継ぎた教育とは何であったのか。君たちはその中で何を獲得したのか。「立派な社会人にするために教育」それがブルジョアジーにとって何を意味し、君たちはどうなり結果にせんじなければならぬのかを真剣に考えてほしい。そしてそこそこわれわれの教育の帝国主義的教義に全面的に対決し、そ

学内とりわけ全二部の運動の突出と発展が、自治会組織を先行し、領導なるという形をもって、全学的に普遍化されたのです。今までわれわれの運動の母体は確かに自治会と各学部の執行機関を通じて、運動の追及と発展を行なう形であったので個人の自覺性を意味では自治会が中心でした。すなはちボツダム自治会規約に則りとした伸びの抑制を生んで行くという過程があるのであり、それ故に個々個人が国家権力、文部省の大学一元支配をもぐるんでいる時、より効果的な斗争を築き上げる為には、全員加盟制の下での自治会組織を内部からشتう学友の結集のもとに取り組む者、學生の側から乗り越えねばならないという運営が現実にわれわれの目の前に現われたのである。このことがとりわけⅡ部商学部その意味では、学究会と運動論を異なったⅢ部商経(商学部自會)でわれわれⅢ部斗争委員会の間に明大斗争においてのストライキ形態、情勢分析の違いを見い出されわれ斗争委員会は、自ら商経会の自覺性という面で、一方においては商経会は国民の争争に対する訴訟中傷を前面に受けながら主張盤を立てられなければならないという、苦しい立場から出発したのです。六月上旬における学内の民青は狂の如く、「バリスト反対、トローリスト学外一掃、一連中止」をスローガンをはり、あたかも新左翼を明治大学から追い出すことによって、中教審における粉々指定をまぬがれ様と、われわれに敵対するというありさまであった。しかしながら、明大バイクードは、中教部=文部省・国家権力へのわれわれの渾身の抗議であり、斗いながでである。したがって一途学生会(ブンド全共斗)六項目要求貫徹の改良主義全共斗の創出ではなく、明らかに中教審 国家権力に対する抗議組織形態の全共斗の創出だったのである。

九月に入つて、国家権力は議会制民主主義を自ら打ち

ることによって、全国各地における広大な全共斗運動の圧殺を計つたのです。それが各大学における当局者とブルジョアの利害の一一致を得る中ににおいて、暴力装置機動隊の日常的、学内導入が始まった証なのです。しかしがら広島大学等においてより一層のうたう学生の反発をくらったのです。しかしながら当局は権力との一体化をありのままに露呈し、機動隊導入からロックアウトといり、射殺手段にはもっとも効果的な戦術を打ち出したのだ。このこと我が明治大学にもはっきりと現われ、10月9日朝をもって機動隊学内入り一ロックアウトを行なう、斗う学生たる多くの学生を分断するという支配者意識まる出しの行動だった訳です。長期のロックアウトと、板ベイにこまれた授業再会は学校当局のもっとも望んでいた「正常化」をもたらしかねないが如く、明治大学内は文字通り中教審大学路線を歩むことによって大学としての生命線を保っている今日なのであるのです。

新入生皆さん、このような暴力的支配を絶対に許してはならないのです。この支配を打ち破る斗いがより一層強固に構築されねばならないのです。70年安保は、日帝共同声明において「極東の平和と安全」という、日帝と米帝との共同支配として、日米軍事同盟の結びつとは明日となった今日における情況を、70年安保祭祭、日帝打倒、沖縄解放斗争を全共斗運動をもって斗わなければならぬのです。アジアにおける斗いは今や、米帝の完全なる敗北に裏打された、ベトナム革命勝利の日は近づいているではありませんか。全ての新生諸君、斗うものの主体、全共斗運動の創出を共に努力し、再度当国国家権力に立ち向かおうではありませんか! 共に斗かおう!

商学院斗争委員会

現 実 の 大 学 と は

政 治 経 済 学 部

理などの中でこそ黒く汚れて切っているという事である今日の大学はそうした社会的諸矛盾の集中的表現であり、かつまたそれら諸矛盾を胚胎しつつ存在している。

日々、東大を立派としての年代後半に日本全国で激化した大学紛糾は闘争へ突入する原因は様々であれ結じて大学のミクティオロギーをぶちこわし、大学の諸矛盾をあばき出し、更には社会範囲の諸矛盾をひきだし権力の実態と本質を日々の下にさらした。そのような中で大学には「学生の自覚」は存在せず「教授会の自覚」のみがあるばかりである。それ故に学生と教授との関係は教え

- 8 -

若き戦士達と共に! 燃えあがる炎を拡大せよ!

駿台法学会 委員長 飯田敏雄

1 始めに

新たなる斗いを担おうとしている新生諸君! とりわけ高校・予備校において斗いを経験し、あるいは自らで確かめられてきた諸君! 君達の概念は少しは変わってきただろう。高校、大学における教育とは何か? 生徒会・自治会が何と空虚なものであったのか? それとも、その手に対して学校批判、あるいは政府支配者がどんな態度、どんな政策をしてきたのか? 更に諸々の政治的観点について一矢安打、沖縄、自衛隊、アジア情勢 etc. 一ブルジョア新聞、マスコミによってだけ左右されていった。それまでの自分がいかに空しかったことか、を自ら斗争を通じる中で、あるいはに触れる中で感じないわけにはいかなかったという風に。確かに多くの人は日常不斷に体制内に生き、正確には生きながら義務教育を受け、地獄の高校をへて生きることなく経つていてるので、やまもすれば我々俗称ゲーブル生にになんとはなしに反感を抱いてみたり、他人事として片付けようとしている限りで、あるいはに触れる中で感じないわけにはいかなかったという風に。確かに多くの人は日常不斷に体制内に生き、正確には生きながら義務教育を受け、地獄の高校をへて生きることなく経つていてるので、やまもすれば我々俗称ゲーブル生にになんとはなしに反感を抱いてみたり、他人事として片付けようとしている限りで、いままでの概念によつてしか説明できずに、何かが軽視され、矛盾が生じる中で困惑しながら、ずるずると日々経過せざるを得なかつたかもしれない。しかし今、私は全国の高校において多様多種の斗争がまきおこり、今なお続いていることを知つているし、その斗争に多くの高校生が決起したし、その斗争が全く無尽に弾圧され国家機械力・機動隊の反革命暴力によって秩序の回復、闘争の庄説を譲り、絶えの闘いの意義、正当性を一切隠蔽し去らうとした。そしてそれが政府支配者の意図、政策に則ったものであることを知っている。

2 革命70年代

日大・東大の闘争を頂点として全国の大学に波及した全共闘運動が1967年10月8日以来の実力闘争によって貫徹され、その正当な闘いの発展が、運動的革命派の闘争がブルジョア教育の実態を暴露し、侵略の段階に突入した日本帝国主義体制に見合った教育の再編に全面的に対決し、そのための秩序、帝國主義学解体の革命的闘争を押し進める中において、日本帝國主義の侵略と反革命に反撃し、その野望を粉砕する闘いへとその帝国主義者の侵略と抑圧を不可避とする資本主義体制打倒・社会主義建設への闘いへと飛躍発展を度々取り日本革命闘争における金字塔をうたた。そして支配階級と労働の革

してその教育を制約している政治社会の矛盾に対決する反戦反安保・沖縄解放の闘いがあつたではなかろうか。

この明大においても大学法科群の「教育の帝國主義的再編構造を明確に提起し、第二文学部のパリストを突破口に全学パリストとして貫徹した。しかしこの闘いが資本主義社会の根柢の矛盾にふれるものであったために、恐怖する全有産階級はわれわれの問題提起を大学の制度改革とすりかえ「社会の要請に答える」という形で帝國主義的再編の一環として「自主改革」せんとしている。國家機力の頂点から教育機関の再編には対決の「ポーズ」をとりながらも、規行の教育の矛盾を市民社会の力場で、解消できると思つてゐる大学当局は、教育の実戦的批判は市民社会の実戦的批判へと向むねばならないことを完全に欠落している。

では教育の矛盾とはわれわれはとていかなるものであったのか。学生とは、自由な自己活動の外観の下、激烈な競争と分断のなかで、より良い労働力商品として自分自身を完成させていくという学生生活を通じて、資本へ押しつける材料として包装されることを、強制される存在でしかない。自己の個性、感性の全面的発展ではなく一面的、奇的発展を強いるのである。その上で「大学の学問研究の自由」が抽象的意識として存在するにすぎないのだ。しかし現行の教育はブルジョア社会にとつても矛盾していることが暴露された。それは急速な産業の高度化に対応できない教育を、「多様性の教育」、「専門教育の充実」という形で産業の帝國主義的再編構造工場制度の確立にあった教育の帝國主義的再編が、当局自身の手により「自主改革」として取扱されんとしている。

そして教育の矛盾に対決することで開始された闘いはいまや、教育とどまらず、ブルジョア社会全体に対する総反乱として、資本への下への绝望的謀叛から立ち上がった青年労働者と連帯した、政治的社会的制約を突破する安保粉粹、沖縄闘争勝利の闘として体现している。

そしてそれは、自分の共同の力で自分の労働を支配せんとするブルジョア社会を根底から変革する新たな共同の行動にはかなはず、全世界が激動期へと突入する内で世界史的なブルジョア人民の総反乱としてあるのである。

われわれ学生を自らの制約を突破せんとする共同の行動を、全共闘運動として強化拡大する中から、帝國の発展の中に自己の運命をひいだそうとする小市民のファンズム大衆運動を粉粹する闘いを構築しようではないか。

法学部新生歓迎実行委員会
法学部闘争委員会

虚像に鉄槌を!!

研究部連合会委員長 加藤勲

新生諸君、君達が今、この大学の門をくぐる時の気持ちは、いったいどんなものに対し胸をふくらませてありますか。混乱と矛盾のただ中に万国博「人類の調和と進歩」という美語で飾ろうとする全くの虚像がこの大學という集團部会にもすっぽりと当てはまるということを皆さんは知っているでしょう。

君達も知つてお通り、この3年間といふものは労働運動、学生運動の最も急進的な部分の今までにない激しい闘いは新たな70年代階級闘争のヒロイックを解き始めました。それはこのごくで言うまでもなく既制的の玻璃面に向けた闘いであったのです。無論この闘いは深い道程を経なければ勝利をつかむ事は出来ないでしょう。そしてその過程には多くの犠牲とともに違いありません。しかし政府・ダルジン・ソとの追従者（議会主義政党）共と結託したマスコミの大資本は自らの黒い手ひき隠し隠し運動の本質をもみ消すのやっかりとなり、あるいはダッヂあげと角材やヘルメットなどをミックスしたようなマゴザを「中立の戦場」という、これまた美語自らを懸念しているのです。確かに直接的暴力は運動の過程には登場せざるを得ない必然性を有している。しかしこれは私達は意図しないわけではありません。それは暴力そのものの多くを取り上げてする事ほどには「かなりこっけいなものであると言ふ事です」。そこで問題になる事はその暴力が誰に向らせるのかと言ふ事が最も重要視されかねるべきなのです。しかしながら「報道の中立者」と名乗る彼等は、そうした行動の本質を追及しようとはしない、ただカタクという機械でしか、その範囲でしか物事を捕えようとはしないのです。それを私達に言わせれば「当然だ」と言葉も持ち合わせていません。なぜなら彼等は運動の本質が彼等の人格を否定するものであり、彼等の存立基盤を根底から突き崩すものであるという事を彼等自身よく知っているからなのです。であるが故に、その運動の本質を国民の眼の前に見せないのである。見せると言う事は彼自身が自分の首をマタでしめつけるに等しからず。

他方、そうした歪曲された報道を以て、耳にした俗に言われる一般市民の人達の様々な意見もまとめてしまえば二つのものではあります。それは財産の不可侵と商業の自由という資本の論理を根拠とした発想であります。例えて言うならば、一人の人が何の理由もかからず他人の所有物を奪うるならば、

- 13 -

はがなんでも暴れたかったから』でないことは周知のことと思います。それは一つは資本社会の破綻の危機と、それに対する人民の不満を押しつけるための新たな海外侵略、国内反革命体制の暴力的迫害によって規定され、同時に銃砲・警察の目をもって階級社会の根本的矛盾をもくろみ、体制はころびを、容赦なく人民の眼の前に晒し出してきた過去と現在を多くの勇気ある人民の闘いによって始めて止めたからでした。

ちなみにあの69年の全国大学闘争を牽引していった68年の東大・東大幹部を見てもざんざい、古風体制の下にさぞやかな人間の要求をされても正義され、泣きをまげば右翼のテロと退学、集会を行うどころか、大学の認可のもとに現れていた新入生集会に左翼の知識の人呼ばれただけで、集会中止命令が出され、強行すれば吉田の私兵＝特務会によってつぶされる。それら暴力の実践の上に不正入学と巨額の「使途不明」なる汚職が公然となされてしまっていたではありませんか。それらの「不眞金」が実は自民党佐藤派の政治資金に入流されていましたことをあまりにも明かにするべきです。そのため日大・東大の殺戮のために権力者はあらゆる暴力的、政治的手段を構ひたてはあります。日大が9項目というさやかな要求に対しでさえ、暴力が一歩も譲歩するどころか、基本的に圧迫しなければならなかったことに、古田個人の恩讐ではなく現代社会が生んだ矛盾をかき見ることが出来たではありませんか。東大についても同様です。そしてより明確です。

医学生の体制内生活権要求の闘いに対し出された処分も上田、豊川という教授が悪者であったからではないのです。医療費の値上げ、受益者不担という名のもとに行われた保険金の値上げと、国際援助の削減は、日本の海外侵略政策の推行のために欠かすことのできない作業であったのです。それだからこそ腰高い医師は許さないものなり、食うかわるるかの闘いにあらざるを得なかつたのです。あの東大の安田放課堂一列品館の死闘はその象徴でした。これらの人々に恐怖した者は「大學生立派」をもって権力者の大學介入の合法化を行なう同時に大学当局に対する恫喝を行いました。「大学の自治を守なければ警察が介入する前に、闇をを压殺せよ」と。何をあれど忠告ではありません。暴力のビロはそれを着実に実行しました。10・21を前に全国の大學生はロックアーリ体制を完結しました。そしてこの予防弾薬は70年に入りや否や、日大において何よりも鮮明に表わされたのです。2月25日、日大全共闘の中村君が期末試験ボイコット呼びかけのためのビラまき中に日大ガードマン＝体育会によって涉収されたのです。これが大学立法の総仕上げであったのです。大学支配体制確立の總

それを守ろうとする意志が一つの行動となって現れるとしてでしょう。その過疎な例として「自警団」と言われる商店街の經營者が組織した団体がつい最近生まれました。そこには人間を作り出し利用するところの貨幣に人間引きぎりまわされ、それを授す者には相手というのが某一個の物体にしか見えなくなり、事の本質を知らざる者はさぞさななく、そこにはただ單一現象を追いかける姿しかないのであります。それはロボットに動かされた人間ロボットという存在でしかないと言ふも過言ではないでしょう。それは自然の態にはまったく融合する事がない。ではいったい何故にそうした本末転倒な事が生じてくるのであるうち、その答は様々な観点からなされるであろう。しかしその骨子となるものには經濟のしきみにあることは現時点に於て言えると思います。それを極端に言えば富める者ほどんぐん富んで行き、貧者はほんの少しの者で貧者でしかないといふ経済構造にあるのです。そこには同じ人間でありながらと言つうの矛盾が生じてきます。そしてその矛盾を解消しようとする意欲がそこに燃いています。それを大別すると二通りに別れる事が出来ます。1つには貧者が貧者になるまたは、貧者であるという原因を考えることなくただ一心に貧者が富者にはい上がる運と死に狂いになる。しかし数多くの者が理性的な社会の経済構造、つまりはもどかたり「理性」という恐ろしい病気にかかり從来の良人へと負け込まれてしまう。つまり意欲が従順といふ「力」に負けてしまうのです。

他方それとは性格を異にする考える者が現われ、貧者という事に関して何故に貴いのか何故にそうなるのかという至極、素朴な疑問を抱き、それを追求する試みをなす。その試みが一部には反秩序という行動に現れてくるのです。前者の考えとは、図式的に色別出来得るとはすれば俗に言われる一般大衆であり、後者の部分が広義の意味の労働運動あるいは学生運動に携わる人間であると言えます。

以上、全くの大きなかな小部分をつまみぐいしたわけですが、そのような人間関係の下にせいじする我々研究部連合会というサークル連合に關係する一人として先にも述べたように、この大學という像を虚像にしてか認めることができないのです。そこからサークル活動という文化運動の創造を暗中摸索の状態で現在、突き進んでいくわけで、すくなくとも我々は「活性」という事は拒否

仕上げであったのです。権力は自から手を汚すことなく、闇の圧迫を策し、下手人を事故死ににまで守ることさえやってのけたのです。

4月政治ストを持つ

暴力支配に対する総反撃を!!

諸君達が入学式を迎えるとき、すでに板バエはとりはらわぬ外見的「正常化」があされているでしょう。それにも間からず学習院は閉鎖されており、私服警官があちこちの陰に隠れ、さわぎが起りだし、神田署から暴動隊がかけてくる体制だけは守られているはずです。それらは「安保非常体制」という名のものに、国家権力と大学当局が一体となり70年を平穡にという願望の裏にほんまりとあります。ロックアウトし、処分し、廃校するといふ争いは、それと一緒にした権力者の沖縄の帝国主義的処分と、海外侵略の道を保証しようという行為にほんまりとあります。確かに70年の政治的重みは、彼らにも僕達にも等しくのしかかっているのです。

11月の佐藤訪米と、日米共同声明がともに明らかになりました。いま彼の頭の中にあらはのほんわかまわぬ「生」への執着にはなりません。あの訪米時の佐藤の醜い姿を思い出してござんなさい。恐らくはその丸の旗とさずまつた羽田空港から、空軍用の笑顔と送りながら飛ばされただったからでしょう。しかし現実は真紅の旗と真赤に燃えさかる人民の怒りにうづめくつきた羽田周辺と、一切の外国便も封鎖した無人の「青、青、乱闘服を着た人間の意識を失った番が居たことは居ました」が空港から、空軍用の笑顔をも忘れ、逃げのびののが精一杯でしかなかつたのです。そして「換された」「共同声明」は一枚の紙切れではなく、自動延長という形で流された安保条約を、より発展させた日米帝国主義者の東南アジア反革命に対する反革命軍事分担の明確化にはかならず、「世界の悲劇」を帝に変わる「アジアの悲劇」帝日のアジア軍事反革命行動への開始宣言にはなりません。今日全アジアを階級につくす革命闘争の趨勢の前に、それのみがブルジョア共の生き残り道だからです。そして、その証しが沖縄の帝国主義的処分にはかならず。それでこれらブルジョア共に追従し御用学者たるもをもって、自らの生活権を権得せんとする大学当局者が、その意向を充分に汲みつくし、先行的反革命者に転じたからといって何ら不思議はなか

それは69年11月の佐藤訪米による日米共同声明にはっきりと見られている。安保体制はその声明によって日米共同のアジア支配安定制として拡大され、帝の抑止力を今緊急に強化しているのである。ブル新に毎日とりあげられるようになった、アジの支配と責任をもつ帝として、いかえればアジにおける革命勢力方に責任をもつ帝として、自衛隊の強化、国防の云々として話されるところのゆえんである。このようにアジにおいて帝國主義とそのカライ对革命派の正面対決として進行しているのである。日本革命の展望はアジ革命の勝利のうちにのみ見出される。であるが故に我々は日米共同声明が序章、一切の反革命策動筋の腰いを1月決戦の地を堅持して総力をあげてやり遂げねばならないのである。革命か、反革命か? これが60年代の闘いである。

3階級と法律

それでは我々は法律という点についてはっきりした見解を出さなくてはならない。『國家とは階級概念なのだと。國家は、一つの階級の階級に対する暴力的闘争あるいは暴力的である。このようにアジにおいて帝國主義とそのカライ对革命派の正面対決として進行しているのである。』(このような階級的思想が帝のアジ侵略を許してしまっているのであり、自ら抑止者はとしての自覚を放棄してしまう結果になる)判決は無条件に悪の実行であるとし、その偏見によって、革命派の暴力的闘争を否定し去らとしている。しかしマルクス・レーニン主義は暴力について、「だらけは歴史上帝のもう一つの役割、つまり革命的な役割を演ずる」といふことと、暴力は、マルクスの言葉をもってすれば、新社会をはらんでいるあらゆる旧社会の助産であるということと、さらに暴力は、それをもって社会的運動を貫徹し直硬直、麻痺した政治的諸形態を粉砕する道具である」と認めている。

結局、ブロタリアーティム革命派の闘いが激化すればするほど、ブルジョア法秩序、及びその人格的表現としての判事は、その本来の使命をかけて懸命とならざるが無い。逆に、人民の闘いは、粗暴にいつ、その根源にまでさし迫るものとなり、法の階級性を張り看破することが、全人民的に可能となる。敵資本家階級が、公的暴力としてこの保安機構に周囲を準備をなしていることを我々は我々が敵支配の根柢にかけばゆくほど、はっきりとしらされるのである。國家が第三権力として階級対立緩和しながら、階級間の暴力的闘争を抑制してその抑止を目的としている以上、全く当りませることではあるが、このように帝國主義階級における支配形態は階級的な共同幻想を敵ブルジョア自らが打破し、暴力を用いてこの暴力支配を貫徹せんとしているのである。それは敵階級の侵略策動そのものであり、帝國主義教育、秩序、思想の確立を不可避のものとしているのである。そしてまたその打倒の為の革命派の権力を持つ大発展させなければならない。全国戦線に全共闘運動を構築せよ!

尚、私は69年東大・1月決戦において判決場にて闘い不運にも逮され今はお拘束されているのであるが、はっきりと階級を演説し、共に外の同志と闘うことをここに宣誓したいと思います。

1970年4月10日

- 12 -

しなければならない。人間が人間ならしめる条件とは「意欲が行動を呼び行動が意欲を呼ぶ」、それは虚偽、虚榮を破滅、克服すること間に人間としての価値が存在すると考えるからです。

その虚像に対して我々は、いったいどのような運動をどのような方法で作り上げてゆかなければならぬのか

か、それは全ての人間に譲せられた「生」という仕事であるのです。新生諸君、君達のパワーを我々と共に發揮しようではないか。

最後に、君達の入学を我々の仲間として扱います。

研究部連合会

特別アピール

4.28 沖縄解放闘争に決起せよ!!

全学共斗会議

新生諸君へ!

僕達がここ数年の闘いととりわけ羽田における闘いから、2年半位で渡って続けて来た闘いの中から学んだこと、創り出して来たことの一切を、いま新生諸君とともに確め合い、まさに発展させて行くためのアピールを発したいと思います。

始めに

すでに新生の皆さん、大学に入る前の教育過程でも学んで来たように、歴史の転換は、ときの支配者によって常に政治の舞台から遠ざけられ「知ること」とを止められていた庶民の多くが、自らの意志を持ち、発言し、行動することによって始めてなしとげられてきました。逆説的に言うならば多くの人々が政治への参加と、歴史の舞台に登場して来るとき、それは歴史の巨大な転換期を意味しているということが出来ないでしょう。

「いま知らねばならないこと」

諸君が受験したとき、明治大学の題は厚い板べいによって覆われており、幾つかの学生がイラマキを行っていたと思います。同時そのとき制服警察官が学外パートナーを行い、私服警官が入口の陰に身をひそめています。すぐ下の神田署に武装暴動隊の待機場所で、大学は完全な国家権力の支配下にありました。過去の支配階級がどうであったように、今日高まりつつある人民の政治への参加と「異議申し立て」に対し、支配者階級は再び歴史の恩をくり返しているのです。

69年全国大学闘争を平面に押し拵ねながら、あの11月闘争を頂点とした学生、労働者の親の政治支配に対する闘いは全民の注視の中心に展開されて行きました。確かに多くの人々はそれらを目の前で見ながら通り過ぎ安住な場を離れようとなかったかも知れません。それにもかかわらず闘いは嵐のような激しさで四つの「政治季節」をつくりあげて行きました。それらが決して偶然や「彼等

学生運動用語」が日常生活の言葉になり、学生運動に対する評議、日々人の会話の中に表われるとき、それ

- 14 -

ったはずです。自らのブルジョア的生活をおびやかされたおくびのようなソクラテスがそれを割り出した革命の人民に対して狂り狂い、最も忌み嫌っていた肥えたブタとさえ同盟を組んだとしても何ら不思議はないのです。70年～70年代の政治的重みとは、まさに全社会的に展開される階級闘争の嵐が、不可避免的に人々の社会的存在基盤を明らかにし、二つに明確に分解された階級が自らの全生命を賭した激戦の時代にほかならないからです。

すでに多くの学生、労働者は70年の巨大な闘を4.28沖縄闘争の中に体现すべき準備を開始しています。それらは、すでに述べる必要もないでしょうが、個々の矛盾に対し闘って来た人々が、あの60年の権力との長い対決の中で（大学や職場にかけられた権力の攻撃の中で）個々の矛盾の解決が、今日の政治体制の根本的変革なしにはありえないことを、はっきり知っているからです。これらの政治体制が、安保、沖縄という鋭い政治的矛盾を集約点として、より反動化された侵略政策を目覚もうとしているとき、これに對決せずして、全ての変革を語ることが出来得なくなってしまっているからです。この恐わしいロックアウト体制を打破するために何よりも必要とされているのが、これらを守り抜いている組織された反革命暴力支配に抗しうる我々の戦闘的団結、連帯なくしてはあり得ないからです。

新入生諸君。我々はいたまめらうことなく君達にこのロックアウト粉飾、そして4.28闘争の革命的決起を呼びかけます。その闘いの大衆的保証を同時に強固なクラス

闘争委員会の建設をもって追行されることを呼びかけます。そしてそれを4月政治ストの確立をもって突き進むことを呼びかけます。

69年に我々の学生、労働者の同窓が、あの血の渦巻に一歩も退くことなく割り出した情況が、抑圧された人々から常に政治をとりあげようとした権力者に対し、直接行動をもった政治参加を要求し、それを全ての人民のもとにしていくのです。そしてそれらの闘いは「全共闘運動」と呼ばれる。革命的運動体をもつことにより、権力の暴力組織に對決する我々の暴力組織を大衆的に割り出しました。いま全ての学友が支配の鉄鎌をこなごなに打ちください、生きとした人間の能動的政治参加機関たる、この全共闘に、クラス闘争委の組織化をもって参加して来ることを呼びかけます。

いま、階級支配の歴史が僕達に強いた非政治的呪縛を打ちやぶり、歴史の転換、変革のかがやける未来を君達そして僕の手でつかみ取ろうではありませんか。

「非政治の強要に譲歩してはならない。われわれの闘争はつねに政治的であった。またそれ以外ではありえないのです。ものわかりの良さ保護者意識、良識によってわれわそに求められている一時的の解決を拒否しよう。」

（ソルボンヌのアピール、「テーゼ、8」）

全二部共闘会議
歴史実行委員会
学 犀 会